

19世紀英語における'busy (in/with) doing' 構文

末松, 信子

九州大学大学院比較社会文化研究科 : 博士課程・日本学術振興会特別研究員

田島, 松二

九州大学言語文化部歴史言語学部門 : 教授

<https://doi.org/10.15017/6796374>

出版情報 : 言語科学. 34, pp.15-20, 1999-02-27. 九州大学言語文化部言語研究会
バージョン :
権利関係 :



19 世紀英語における ‘busy (in/with) doing’ 構文

末松 信子*・田島 松二

I

筆者のひとり、先に、コンピューター・コーパスを利用して、「～するの
に忙しい」を意味する表現形式 ‘busy (in/with) doing’ における前置詞 in ある
いは with 出沒の問題を、現代英米語に関して観察した。¹⁾そして、今日では
イギリス英語、アメリカ英語ともに、口語はおろか書き言葉でも ‘busy do-ing’
型が事実上唯一の形式であることを確認した。その際、この状況は前世紀末も
しくは今世紀初頭に既に一般化していたのではないか、という推測を行った。
小論の目的はその推測の正否を検証することである。つまり、19 世紀の具体的
資料に基づいて ‘busy (in/with) doing’ 構文を調査し、当時の使用状況を明ら
かにすることである。

調査の対象とした資料は、インターネット上でコーパス検索が可能な次のも
のを使用した。米国バージニア大学の The Modern English Collection
(<http://etext.lib.virginia.edu/modeng.browse.html> 以下バージニア・コーパス)
とミシガン大学の Public Domain Modern English Search (<http://www.hti.umich.edu/english/pd-modeng> 以下ミシガン・コーパス) である。これら近代
英語に関する膨大なコーパスのうち、刊行年代が 1800 年から 1900 年のテキ
ストに限って検索した。両コーパスは重複するテキストも多いので、バージ
ニア・コーパスを基本とし、重複しないテキストに関してはミシガン・コーパス
から補った。しかし、バージニア・コーパスには利用上の制約があるために、
19 世紀に関しても年代的にコーパスの量にばらつきが見られることを断って
おかなければならない。

II

まず簡単に ‘busy (in/with) doing’ 構文の歴史を見てみよう。この構文に関す

* 比較社会文化研究科博士課程・日本学術振興会特別研究員

¹⁾ 田島 (1995), pp. 65-73 参照。

る数少ない情報を提供してくれる OED、尾上 (1986) 等に基づいて、田島 (1995, p. 68) は、‘busy in doing’ 型も ‘busy doing’ 型もともに 15 世紀頃から見られるようになり、19 世紀初頭までは in の付く形式が優勢であったが、19 世紀後半になると ‘busy doing’ 型に取って代われ、今日ではこの in の付かない形式が一般化した、と述べている。また ‘busy with doing’ 型については、純然たる名詞を従えた ‘busy with’ 構文は OED に 1876 年の用例が 1 例挙げられているが、ing 形を伴ったものは記録されていない。Jespersen (1909-49) 等にも見られず、いつ頃初出したのか今のところ全く不明である、と述べている。以上のことをふまえて、19 世紀英語における ‘busy (in/with) doing’ 構文の分布状況を見てみよう。

III

バージニア・コーパスを検索すると、該当する例は、76 テキストに 143 例見られる。このバージニア・コーパスと重複しないテキストをミシガン・コーパスで検索すると、2 テキストに 2 例見られる。したがって計 78 のテキストに 145 の該当例が得られたことになる。²⁾ その内訳は ‘busy in doing’ 型 31 例 (21.4%)、‘busy doing’ 型 114 例 (78.6%) である。しかし、前置詞 with を伴う ‘busy with doing’ 型は 1 例も見られなかった。論を進める前に ‘busy in doing’ 型と ‘busy doing’ 型の例をそれぞれ 1 例ずつ挙げる。末尾の [] 内の数字は各テキストの刊行年次である。

- (1) Only Antonia was anxious for the details, and she had been busy in preparing the respectable meal which her mother had so long craved. (Amelia E. Barr, *Remember the Alamo* [1888])
- (2) Pent became very busy superintending the fire of his absurd battery. (Stephen Crane, *The Revenge of the Adolphus* [1899])

²⁾ 明らかに「～するのに忙しい」の意を表す ‘busy (in/with) doing’ 構文のみを調査対象とし、次のような付帯状況を表す分詞構文を従える例は除外している。

The thing only happened yesterday, and I have been all the morning busy, getting the injunction, and seeing Mr George Kennedy. (Anthony Trollope, *Phineas Redux* [1873])

上述したように 19 世紀全体では ‘busy in doing’ 型 21.4%、‘busy doing’ 型 78.6%と、後者が圧倒的に多く用いられている。では 19 世紀の前半と後半とでは ‘busy in doing’ 型と ‘busy doing’ 型の分布状況に違いは見られるのだろうか。便宜上 1800–1900 年を 25 年ずつに区切って、それぞれの用例数を見てみると次のような結果となった。ただし先述したように、利用できるテキストの量には年代的にばらつきが見られ、とりわけ最初の 25 年は該当例を含むテキストはひとつのみであった。

	1800–25	1826–50	1851–75	1876–1900	
busy in doing	1 (100%)	2 (25%)	16 (32.7%)	12 (13.8%)	31 (21.4%)
busy doing	0 (0%)	6 (75%)	33 (67.3%)	75 (86.2%)	114 (78.6%)
	1	8	49	87	145

1800–25 年では ‘busy in doing’ 型のみ 1 例見られる。次の (3) がそれで、1822 年の書簡で用いられたものである。

(3) “Duncan has been *busy* of late *in making* your patterns and they are nearly done—” (Jefferson, Thomas, and others, *124 Letters to and from Jefferson, 1821–1822* [1822])

次の 1826–50 年には ‘busy in doing’ 型が 2 例、‘busy doing’ 型が 6 例見られる。19 世紀の前半では用例数が少なく断定的なことは言えないが、1850 年頃までにはすでに ‘busy doing’ 型が優勢になっている。³⁾

19 世紀も後半の 1851–75 年は、その前後と比べて ‘busy in doing’ 型の頻度がやや多くなっているように見受けられるが、該当する 16 例中 9 例が Harriet Beecher Stowe, *Uncle Tom’s cabin, or Life among the lowly* (1852) からのものである。(このテキストでは計 12 例のうち ‘busy in doing’ 型が 9 例、‘busy doing’ 型が 3 例である。) この Stowe 夫人からの用例を除くと、1851–75 年は ‘busy in doing’ 型 7 例 (18.9%)、‘busy doing’ 型 30 例 (81.1%) であり、1826–50 年よりも ‘busy in doing’ 型が少なくなり、‘busy

³⁾ OED の引用例を分析した新井 (1996, pp. 5–6) は、18 世紀には圧倒的に ‘busy in doing’ 型が多いことを指摘している。

doing' 型が増えている。最後の四半世紀 (1876-1900) になると、'busy in doing' 型 12 例 (13.8%)、'busy doing' 型 75 例 (86.2%) といった具合に 'busy doing' 型が一層多くなる。

以上のことから、19 世紀においては、前半よりも後半、さらには 1900 年に近づくにつれて次第に 'busy doing' 型が 'busy in doing' 型を駆逐し、一般的な形式となっていることがわかる。

ところで田島 (1995, pp. 69-72) の現代英米語に関する調査では、'busy in doing' 型が 1 例、'busy with doing' 型が 1 例見られた。次の (4)、(5) がそれぞれの例である。

(4) He was *busy*, he said, *in having* someone submit to a monkey-gland operation. [田島 1995, p. 70]

(5) Martha was the first one to spot the hand signal, *busy* as she was *with watching* the door and *waiting* for her golden opportunity. [田島 1995, p. 71]

いずれも、*busy* と *ing* 形との間に介在要素があり、もし前置詞がなければ両者の関係が曖昧になる。従って前置詞 *in/with* が用いられたのは、構造上、意味上の理由によると説明されている。19 世紀の資料に関しては、前置詞 *in* が用いられた 'busy in doing' 型は 31 例見られる。そのうち *busy* と *in doing* との間に何らかの介在要素が含まれているのは、上記 (3) と次に示す (6) の 2 例のみである。これらに関しては、構造上・意味上の理由から前置詞が用いられたと説明することは一応可能である。

(6) As might have been expected, the young Prince lost his heart completely to the beautiful image, and it was impossible to get him out of the room, so *busy* was he *in watching* the lovely unknown. (Andrew Lang, *The Yellow Fairy Book* [1894])

しかし、残りの 29 例はいずれも *busy* と *ing* 形との間に介在する要素はなくて、'busy in doing' という形式をとっている。したがって、前置詞 *in* が用いられたのは構造上・意味上の制約によるものとは言い難い。19 世紀にあつては、現代英語の場合ほど、'busy in doing' 型を用いることは珍しいことではなかつ

たと考えられる。

次に、イギリス英語とアメリカ英語との間に用法上の差があるのだろうか。英・米における ‘busy in doing’ 型と ‘busy doing’ 型の分布状況を示したのが次のものである。

	<u>busy in doing</u>	<u>busy doing</u>
英	11 (19.3%)	46 (80.7%)
米	20 (22.7%)	68 (77.3%)

イギリス英語、アメリカ英語ともに ‘busy doing’ 型が全体の 8 割前後を占めている。アメリカ英語において若干 ‘busy in doing’ 型が多いが、これは先にも触れたようにアメリカの作家 Stowe 夫人の個人的特徴を反映したものと考えられる。Stowe 夫人からの用例、‘busy in doing’ 型 10 例、‘busy doing’ 型 5 例を除くと、‘busy in doing’ 型は 10 例 (13.7%)、‘busy doing’ 型は 63 例 (86.3%) となり、イギリス英語よりも前置詞 in を伴う比率はむしろ低くなる。しかし全体的には、英・米の差はほとんどなく、19 世紀においてはともに ‘busy doing’ 型が一般的な形式であったと言える。

IV

以上、インターネットを利用して、19 世紀 (1800–1900) における ‘busy (in/with) doing’ 構文の使用状況を見てきた。最初の四半世紀 (1900–25) に関しては得られた用例が少なすぎて結論めいたことは言えないが、前半全体では ‘busy doing’ 型が優勢である。後半になると ‘busy doing’ 型が圧倒的に優勢になり、最後の四半世紀では 9 割近くを占めるようになる。つまり ‘busy doing’ 型が一般的な形式となっている。しかし、前置詞 with を伴う例は 1 例も見られない。一方イギリス英語とアメリカ英語ではほとんど差はなく、ともに ‘busy doing’ 型が一般的な形式である。

田島 (1995, p. 72) は、‘busy (in/with) doing’ に関する今日の状況が、前世紀末もしくは今世紀初頭に既に一般化していたのではないかと推測していたが、今回の調査はそのことを裏づけたことになる。しかし 19 世紀末においても、‘busy in doing’ 型は全体の 1 割以上も用いられている。前置詞を用いなければならない構造上・意味上の理由も考えられないことから、19 世紀にあつて

もこの型はある程度使われていたことになる。したがって、‘busy doing’型が今日のように事実上唯一の形式であったとは言えないまでも、事実上唯一の形式になりつつあったとは言えそうである。

参考文献

- Jespersen, Otto. 1909–49. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. London: George Allen & Unwin.
- OED = *The Oxford English Dictionary*. Oxford: Clarendon Press, 1933.
- 新井洋一. 1996. 「近代英語における「従事」の意味を表す構造文の諸相」『英語コーパス研究』（英語コーパス研究会）3, 1–26.
- 尾上政次. 1986. 「“Busy writing” タイプ構文の種々相」『中央英米文学』（中央英米文学会）20, 1–13.
- 田島松二 (編著). 1995. 『コンピューター・コーパス利用による現代英米語法研究』. 開文社出版.